



237号

2018 / 10 / 1

日中文化交流市民サークル‘わんりい’

〒195-0055 町田市三輪緑山2-18-19 寺西方

☎044-986-4195

<http://wanli-san.com/>

Eメール:t_taizan@yahoo.co.jp



ラオバン
観光ホテルの老板(オーナー) 四川省西南部チベット族の田舎街で一番大きなホテルの老板。手にしているのはかぎ煙草。家族経営で権力を握っている。歩行が少し不自由だが、若者が乗るようなタイヤのはみ出た四駆車を乗りこなす。そばに立つ女性は身内か? マスク姿はこの地の一般的な装い。

(2018年7月、四川省カンゼ・チベット族自治州馬尼干戈にて マニガンク 佐々木健之撮影)

晋の景公が重い病気にかかり、名医が呼ばれて診察することになりました。名医が到着する前の晩、晋の景公は夢を見ました。夢の中で、景公は自分の体内の病が二人の小人となって、自分の枕もとで話しているのを聞きました。一人の小人が言いました：「明日には名医が来るそうぞ。見つかったらどうしよう!」すると、別の小人が言いました：「我々は今、横隔膜の上、心臓の下に入っているんだから、名医だってどうすることも出来ないさ。心配しなくてもいいんだよ!」

あくる日、名医が到着して、景公を診察してから言いました。「王様の病気は、横隔膜の上、心臓の下に入ってしまったので、どんな薬もそこまでは届きません。」と言いました。はたして景公は、間もなく亡くなりました。

古くから、中国医学では心臓先端の脂肪の部分「膏」と言い、心臓と隔膜の間を「肓」と言って、病がここまで進むと、どんな薬も効き目がないと言われていました。



満柏氏画

すのを聞いて、すっかり「こうもう」で正しいと思っていました。

中国語を始めるようになって、「膏肓」を、中国語で何と読むかと調べた時、「膏はgao 肓はmang=膏肓はgao-mangか」と見当をつけて探しましたが見つかりません。それで、改めて日本語の辞書で、「こうもう」と引くと、「こうこうの誤り。『肓』を『盲』と読み間違えたことによる俗用」と出ていました。

驚いて、字をよく見ると、膏肓の「肓」は「亡」の下が月でした。これを「亡」の下を「目」と読んで、勝手に「もう」と読んだのですが、辞書に態々載せているということは、誤用している人がかなり多いのだと納得したものでした。

中国医学の始まりは、文献からも紀元前2000年にまでさかのぼることができるそうで、医学用語も、「五臓六腑」とか「臍下丹田」とか、其のまま四字成語として使われており、人々の生活の中に溶け込んでいます。

日本でも薬膳や気功に興味のある方が増え、それにつれて用語や思想が少しずつ一般にも知られるようになって来ましたが、流石、中国は歴史が違います。一般の人々にも、「おばあさんの知恵」としてほとんど「常識」となっているようです。

北京にいた時、同年配の人々との集まりで、「ちょっと歩きすぎて足が痛い、疲れた」と話すと直ぐに、「どこどこのツボを押さえると良い」とか、「なにをどのように料理して食べると疲れが取れる」とか、あちこちからアドバイスが飛んできました。

最近になって、薬膳のお話を聞く機会があり、食材ごとに持っている機能が違い、薬膳は、症状に合わせて、それらを組み合わせて料理するのだと知りました。その中に北京で貰ったアドバイスを裏付けるお話があり、民間の言い伝えも、中国医学の理にかなっているのだと感心しました。

言葉の意味：「膏」は心臓先端の脂肪部分、「肓」は心臓と隔膜の間。病気が、薬が効かない程重くなった状態のことを言う。

使い方：病気が、膏肓に入ったので、病人はもう生還(快復)の見込みが無くなった。

日本語でもそのまま使い、読み方は「病膏肓に入る(やまい、こうこうにいる)」ですが、日本では、病状にはあまり使わず、趣味などが高じて、周りの人達が呆れるほどになった時、「あれはもう、病膏肓に入るだね。今更止めることは出来ないだろう」などと使いますね。

そして、そんな時、「病こうもうに入る」と言われることが間々あります。実は、私もごく若い時に、この字に出会い、勝手に「こうもう」と読んでいました。読むばかりでなく、周りの方が何人か、「病こうもうに入る」と話

Wú níng sǐ yú èr sān zǐ zhī shǒu
无宁死于二三子之手

無寧ろ二三子の手に死なん<子罕第九>

うえだ あつ お
桜美林大学名誉教授 / 孔子学院講師 植田渥雄



かなり晩年のことと思われませんが、孔子が一時危篤状態に陥ったことがあります。あるいは諸国を周遊中の出来事であったかもしれません。若い弟子たちとしては、常に想定していたとはいえ、聖人とも崇める師匠が死ぬということは一大事です。他の弟子たちがどう反応したかについては記録がないのでよくわかりませんが、ここに登場してくるのは子路です。『論語』には次のように記されています。

「子疾病。子路使門人为臣 (Zǐ jí bìng。Zǐ lù shǐ mén rén wéi chén)」(子、疾、病なり。子路、門人をして臣たらしむ<子罕第九>)。孔子の病状が悪化した。この場合「疾病」とは、病状が重くなることをいいます。そこで子路は門人たちに命じて、臣下の礼を以て孔子の最期を看取る準備をさせた。この場合の「門人」は子路自身の門人と見ることもできし、孔子の門人と見ることもできます。旅先で孔子に万一のことがあれば、取り敢えず「殯」の儀を最年長の子路が取り仕切るようになっていたのでしょうか。ところが幸いなことに孔子の病状は回復に向かいました。「病间 (Bìng jiàn)」(病間なり)。「間」とは病気が少し良くなることをいいます。

子路としては恩師の最後に相応しい最高の礼を尽くしたつもりでいました。ところが病状が回復した後、孔子は怒りを露わにしました。その理由は、死んでもいないのに葬儀の準備をしたからではありません。中国では親が重病にかかった場合、息を引き取る前に葬儀の準備をすることは、最善の孝行とされています。後に病状が回復することがあっても、決して責められることはありません。孔子が怒ったのは次の理由からです。

「久矣哉！由之行诈也。无臣而为有臣。吾谁欺？

欺天乎？(Jiǔ yǐ zhāi! Yóu zhī xíng zhà yě。Wú chén ér wéi yǒu chén。Wú shuí qī? Qī tiān hū?)」(久しいかな、由の詐りを行うや。臣無くして臣有りとなす。吾れ誰をか欺かん。天を欺かんか)。子路はずいぶん長い間、人をだましおったな。わたしには臣下がいけないのに、さも有るように見せかけおって。こんなことをされると、わたしは天を欺いたことになるではないか、と。

当時の孔子は、既に大夫の職を辞し、庶人の身でした。庶人である以上、葬儀も庶人並みでなければならぬ。臣下を付けるなど以てのほか……。各人が互いの分を守り、出過ぎた真似をしない。個人的感情による区別も許さない。孔子にとって、これが社会の安定を回復するための基本条件であり、謂わば天の教えでもありました。

とはいえ、孔子は子路たちの思いを、決して無視していたわけではありません。そしてさらに続けます。「且予与其死于臣之手也，无宁死于二三子之手乎！且予纵不得大葬，予死于道路乎？(Qiě yú yǔ qí sǐ yú chén zhī shǒu yě, wú níng sǐ yú èr sān zǐ zhī shǒu hū! Qiě yú zòng bù dé dà zàng, yú sǐ yú dào lù hū?)」(且つ予は臣の手に死すより、無寧ろ二三子の手に死なんか。且つ予縦い大葬を得ずとも、予道路に死なんや)。それに、わたしは臣下に看取られて死ぬより、お前たち普通の者に看取られる方がよっぽどまだ。立派な葬式はしてもらえないかもしれないが、道端に野たれ死にするわけでもないだろう、と。

臣下ではなく、愛する弟子たちに見送られたい。これは孔子の本音でもあったようです。

(わりい「中国語で読む漢詩の会」講師)

五都市 (上海・南通・揚州・鎮江・無錫) 周遊 (2)

寺西 俊英

2日目(5月21日)の夜が明けた。今日は鑑真和尚の故郷・揚州に向かう。揚州と言えば次の李白の「黄鶴楼送孟浩然之広陵」を思い浮かべる。黄鶴楼は、「中国三大カマド」の一つと言われる武漢市内を流れる長江に面して建っているが、そこから揚州まで延々と船で下って行く様を詠っている。

故人西辞黄鶴楼
烟花三月下揚州
孤帆遠影碧空尽
唯見長江天際流

中国には、必ず訪問したい都市がいくつかあるが、揚州は是非行ってみたかった街である。揚州は隋の煬帝が造らせた「京杭大運河」が有名である。北京から杭州までの約2500キロメートルに及ぶ長さであるが、この運河は長江の北岸にある揚州で交差したため、揚州は交通の要衝になった。江南の豊かな物資が都に直接運べるようになったことから当時、長安、洛陽に次ぐ大都会であった。大運河は物資を北へ輸送する新たなルートになっただけでなく、南北の文化交流に大いに寄与した。隋は運河などの大工事で民を疲弊させ、高句麗への3度の遠征で庶民の心が離れ30年という短命で終わった。しかし、大運河は東流するいくつかの大河川で分断された国土をまとめやすくし、中国の統一に多大なる貢献をした。次の唐代(618年～907年)は300年の長期政権を維持することが出来たが、これも大運河の恩恵を被ったと言えよう。

さて、ホテルの駐車場で待機していたバスの前で記念写真を撮り、我々は8時15分頃出発した。南通から揚州まで約200キロあり、10時半過ぎに揚州市内の「瘦西湖」に到着した。「瘦西湖」とは、杭州にある有名な「西湖」を真似て造ったと言うことであるが西湖より瘦せてほっそりとしているのでこの名が付いたとか。私は真似て造った割にはあまり似ていないと思うのだが。

この湖の見どころは、「五亭橋」と「二十四橋」とい

う。瘦西湖は揚州のシンボルと言われるそうであるが、五亭橋は瘦西湖のシンボルである。頑丈な石造りの大きな橋の上に四阿を五つ連ねたような形をしていて、一度見るとその姿を忘れることのできないほどの優美さである。五亭橋は、清の第6代皇帝の乾隆帝(1711年～1799年)の南巡に合わせて造られた。完成してすでに200数十年が経っている。乾隆帝は江南地方が好きらしく、この地には6回も行幸しており杭州や紹興など各地を巡りそこで詩歌を残している。橋の中程からは遠くに「釣魚台」が望まれ、一幅の絵のようである。釣魚台は字の如く乾隆帝が行幸の際、釣り糸を垂れて楽しまれたところであるが、この場所から見る五亭橋が一番素晴らしいと言われている。

揚州と言えば「塩商人」が有名だ。塩を作っているのではなく、今の商社のように塩の流通を一手に握り、巨万の富を築き上げたのである。蘇州にも富豪が造った庭園がたくさん残り世界遺産となっているが、揚州も蘇州ほどではないがカネに飽かした庭園がいくつも造られた。【しかし太平天国の乱(1851年～1864年)、辛亥革命(1911年)、第一次国共内戦(1927年～1937年)などで当時の庭園や街並みは殆ど失われた】彼らは皇室との関係を強化し権益を守るため、帝の南巡に合わせて詩歌の好きな帝のために五亭橋を造りゴマを擦ったりしたのだ。また、北京の北海公園にある白塔を真似て帝の旅の



優美な姿を見せる五亭橋



瘦西湖の入口

慰めとして白塔を造った。

二十四橋については、ガイドによると〈橋の長さ24メートル、幅2.4メートル、橋の両側の石段各24段・・・〉としたところからの命名のようであるが、このような石造りのタイコ橋は中国各地に似たような橋があり私にはあまり印象に残らなかった。

瘦西湖を見終わって近くのホテルの2階のレストランで昼食を摂った。昼食なのに食べきれないほどの料理が出て来た。午後の予定は、鑑真が住職であった大明寺、揚州随一の名園である个園(個園)、清代の揚州を再現した東関街を見てホテルに向かう。揚州の有名な観光地はこの辺りに集中していて、効率的に回れるのもよい。食後、このホテルから歩いて大明寺に向かった。

大明寺は、鑑真が日本に来る前にいた寺院である。大きな構えの門から中に入ると境内は結構広い。すぐ目についたのは九層の「^{すいれいとう}栖霊塔」である。塔を遠くに見ながら左側に目を移すと、日中両国が協力して建てた「鑑真記念堂」がある。中は薄暗く深閑としていて中央に鑑真の座像がある。この座像は、唐招提寺の御影堂にあるものと同じで思わず手を合わせた。御影堂のそばにある石碑に、松尾芭蕉が唐招提寺を訪れた際に詠んだ句、〈若葉して御目の栗ぬぐはばや〉を思い起こさせる。記念堂の周辺は緑に囲まれていて皆で散策を楽しんだ。大明寺は前述の太平天国の乱で惜しくも全焼した(1853年)。しかし1870年には再建されている。中国はその昔から幾多の戦乱、近年では紅衛兵による全土に及ぶ破壊行

動でどのくらいの国宝級の文物や建築物が無に帰したことであろうか。

ここで鑑真(688年～763年)の足跡を改めて辿ると・・・

鑑真は、揚州で生まれ14歳で出家し、大雲寺に住んだ。長安・洛陽で修業を積み713年に故郷の大雲寺に戻る。さらに研鑽を積み江南第一の大師と称されるに至る。宗教界における鑑真の評価は極めて高く、いずれは中国仏教界の最高位に就く人と見られていた。そのような時、742年に遣唐使船で唐を訪れていた留学僧の栄叡、普照から、聖武天皇が戒律を日本に伝えるよう懇請されたことを伝えた。その時に鑑真の行った行動は周囲を驚かせた。招請を受けて鑑真は僧侶を一堂に集め、この中に日本で戒律を行うための希望者を募ったが、誰一人として手をあげるものはいなかった。何も荒れ狂う東シナ海を渡るという危険を冒してまで皆は行きたくなかったのである。その場の様子を見た鑑真は自分が行くことを決意した。師匠が行くとなるとさすがに知らぬふりはできなかつたと見え、結局17人の僧侶が随行することになった。そこから苦難の連続であった。危険な旅に出ようとする師匠を気遣って弟子が勝手に渡航を中止させたり、何度も暴風に遭遇し、南の海南島まで船が流されたりしながらも、ついに6度目で沖縄にかりうじて漂着した。そこから島伝いに大宰府までたどり着き、ついに753年渡航に成功した。そして亡くなるまでの10年間、唐招提寺や東大寺において多くの人に戒律を授けた。しかし5度目の航海の時、無理がたたって失明した。

さて、有名な鑑真の失明した姿の座像は、死去を惜しんだ弟子の「忍基」という僧が彫像を造った。日本最古の肖像彫刻であり、国宝である。大明寺の記念堂にある座像は、実は本物が1980年に揚州に里帰りした時に模して製作されたものである。里帰りした時は、大変なニュースになり一目見ようと21万人もの人々が訪れたそうである。日中両国民にこれだけ尊敬を集めた人物を他に私は知らない。

揚州については、2回に分けて書いていく予定である。次号は、名園の个園(個園)、東関街、そして揚州の文化などについて述べて行きたい。(続く)

➤ しっかりと根付いているエスペラント

分科会が無神論や共産主義、そうかと思えばフリーメーソンなどをテーマにして開かれていたのにも驚きましたが、それ以上に驚いたのは主に夜に行われたコンサートのことでした。

ギターを片手に歌う二人の壮年の男性、女性だけのギターでの弾き語り、ヴァイオリンの演奏、28ほどの言語を操るフランス出身の男性エスペランティストなど、それぞれみんなエスペラントで歌うのを聴くにつけ、エスペラントが確かに文化として根付いていると思い感動しました。

どこにも故郷を持たない人工語であるエスペラントは文学的表現ができないのではないかと一時思い、かつてその点でエスペラントに不満を持っていたこともありましたが、しかしこれは、エスペラントに対する私の浅い理解であると実感的にも思いました。

世界のエスペラント事情に通じている菊島和子さんによれば、英語を母語とするエスペランティストたちが、「英語の表現力よりエスペラント語の表現力の方が大きい」と良く言うそうです。

エスペラントでのオリジナルの詩や小説を発表する人の存在を知ると、私も感性的にその言葉がわかるような気がします。意外に思われるかもしれませんが、現実に英語の先生だった人がエスペラントをしっかりと勉強し、エスペランティストとして活躍しています。

➤ 国ではなく民衆同士の交流言語

その代表的な存在が堀泰雄さんという群馬県前橋出身のエスペランティストです。堀さんは高校の英語の先生でした。父上がエスペラントを学習された方で、あれほどエスペラントに熱心だった父親に見習おうとエスペラントを毎日3頁読み、それを休まず7年間続け、毎月エッセイを2本書いてエスペラントをマスターされました。そしてエスペラントを自由自在に操り、東日本大地震の被害状況などをエスペラントでメールや本にして世界に発信していま

す。まさにエスペランティストの鑑のような存在です。堀さんはまさに民衆の一人として世界のエスペランティストたちに対して福島現在の被災状況などを発信し続けているのです。

リスボンでの初日の夜〈Nacia Vespero〉という主催国の夕べがあり、そこでポルトガルの民衆音楽

であるファドやフォークダンスが披露されました。その最後には客席の一番前列にいた私もポルトガルの若い女性から舞台に引っ張られて踊りました。その中にも堀さんの踊る姿も見えました。堀さんからは「大類さんも若いね。両腕で若い女性のお尻を乗せて・・・」と言われました。これは男女が一緒に輪になって踊る場面の中に、男たちが両側の女性たちのお尻を腕に乗せて踊るシーンでした。もちろんその中には堀さん^{くりすけい}もいたはずですよ。

かつて栗栖^{くりすけい}継さんというチェコ文学者でエスペランティストだった方がいます。私も氏の警咳に接したことがありました。その栗栖さんは戦前、ロシアのエスペランティストと文通をしていました。ある時、そのロシアから送られてきた本の中に小さな紙に書いたメモが入っていました。そこには、「君たちが理想のように思っているロシア革命はそんなものじゃないよ」と記されていたのです。

日本のインテリの間では、ロシア革命を輝かしいものと見ていた中で、栗栖さんは初めてロシア革命に対して疑問を持つようになったのです。いわば民衆の本当の声がエスペランティストを通して理

解し合うような友人関係ができていたのです。

➤ リスボン散策

世界から1500人ほどが参加した大会でしたが、日本からも100名近い人が参加していました。その中に、名古屋から来た80歳になるご婦人が一人で参加していました。彼女は、エスペラントはどのようなものか、それを知るにはまず世界大会に参加してみよう、実際にどのように使われているのかと10年ほど前に初めて参加し、それからエスペラントを勉

第28回 ジャーナリスト、方正友好交流の会事務局長、著書『ある華僑の戦後日中関係史』

大類 善啓（おおるい よしひろ）

混迷の時代を拓くザメンホフの人類人主義「私は人類の一員だ！」

強し始めたと言ってくれました。彼女曰く、ツアーで海外旅行しても、ガイドがバスでいろんなところを案内するけど、帰ってきて何も覚えていない。その点で、エスペラント世界大会は違ふと、それ以降、この大会に参加しているようです。

リスボンは前にも書きましたが、私にとっては初めての地です。たいして解りもしない分科会にできるだけ参加しようと思えば、時間がなくなってしまう、リスボンの街歩きはできません。

大会が主催する遠足に参加する人も多いのですが、団体に観光するは止めてリスボンの下町をひとりで散策しようと前々から考えていましたので、地下鉄を利用してバイシャ地区、その西側のバイロ・アルトなどを歩きました。バイシャは低い土地、バイロ・アルトは高い地区という意味のようですが、高いビルとビルとの間の通りはなかなか趣きがあり、また路面電車のノスタルジックな雰囲気も大いに楽しみました。

チンチンと警笛を鳴らして走る路面電車には、季節から他の国々から来ている観光客も多く、英語やフランス語が飛び交っていました。

リスボンは坂の多い街です。おぼつかない足取りで坂を上がる老婦人を見ると大変だなあとも思いました。しかし、なかなか捨てがたい魅力がリスボンの街にはありました。かなりの日本人も分科会だけでなく、大いにポルトガルの旅を楽しんでいるように見えました。

▶ 高齢者が多い世界大会

少子高齢化現象が反映しているのか、この大会でも後期高齢者が多いように見受けられました。この大会とは別に、世界青年エスペラント大会がスペインであり、若い人たちはそこに参加しているでしょう。

日本から来たある人に、「大類さんはなぜエスペラントを学ぶことにしたの」尋ねられ、「呆け防止とホマラニスム(人類人主義)ですね」と言ったら、「最近ホマラニスムなんていう人も少なくなったね」と言われたのが印象に残りました。

「ホマラニスム抜きに何がエスペラントなんだ」という思いを持ちながら、これが今の世界のエスペラントの現状なのか、とも思いました。しかし、そうい

うことも含めて大いに勉強になり、またリスボンの日々を楽しんだ世界大会でした、

この連載もこれで一応、終わりにします。長い間ありがとうございました。最後にこの連載原稿を書くに当たって参考にした主な文献を記しておきます。

●参考文献

- 20世紀とは何だったのか—マルクス・フロイト・ザメンホフ、なだいなだ・小林司対談集、(朝日選書、1992)
- ザメンホフ—エスペラントの父、伊東三郎著、(岩波新書、1950)
- 高くたかく遠くの方へ—伊東三郎遺稿と追憶、渋谷定輔・埴谷雄高・守屋典郎編、(土筆社、1974)
- 嵐のなかのささやき、長谷川テル著、高杉一郎訳、(新評論社、1954)
- 長谷川テル—日中戦争下で反戦放送をした日本女性、「長谷川テル」編集委員会編、(せせらぎ出版、2007)
- 中国の緑の星—長谷川テル反戦の生涯、高杉一郎著、(朝日選書、1980)
- 人類愛に捧げた生涯—人物近代女性史、近藤富枝著、瀬戸内晴美編、(講談社、1981)
- 闇を照らす閃光Ⅱ—長谷川テルを上海・重慶に偲ぶ、あごら、(BOC出版、2004)
- 危険な言語—迫害のなかのエスペラント、ウィリッヒ・リンス著、栗栖 継訳、(岩波新書、1975)
- エスペラント—異端の言語、田中克彦著、(岩波新書、2007)
- 反体制エスペラント運動史、大島義夫・宮本正男著、(三省堂、1974)
- ザメンホフの家族たち—あるエスペランティストの精神史、高杉一郎著、(田畑書店、1981)
- 我が身は炎となりて—佐藤首相に焼身抗議した由比忠之進とその時代、比嘉康文著、(新星出版、2011)
- 吹雪く野づらに—エスペランティスト斎藤秀一の生涯、佐藤治助著(良書センター鶴岡書店、1997)
- 出口王仁三郎—屹立するカリスマ、松本健一、(リプロポート、1986)
- 日本エスペラント運動の裏街道を漫歩する—「人物」がつづる運動の歴史、小林司・萩原洋子著、(エスペラント国際情報センター、2017)
- ザメンホフの生涯、エドモン・プリヴァ著、水野義明訳、(リックマンズワース、1957)
- 人物でたどるエスペラント文化史、後藤齊著、(一般財団法人日本エスペラント協会、2015)
- リディア—エスペラントの娘リディア・ザメンホフの生涯、ウェンディ・ヘラー著、水野義明訳、(近代文藝社、1994)

—(他)

東西文明の比較(28)

▼ヤマト(大和)の時代▲

陽光新聞社・顧問
塩澤宏宣

歴史の教科書では「奈良時代」と教えられたと思いますが、本稿では、「ヤマトの時代」として述べたいと思います。この時代は、磐余(奈良県桜井市阿部付近の古地名。履中、清寧、継体、用明天皇らの皇居のあった地域で、5～6世紀頃の要地)から飛鳥、そして藤原京を経て平城京という遷都を重ねた時代を総称した時代を意味します。

私見として加えれば、この時代は、仏教移入を先導役にして、豊かな外国文化を日本に導き、近代化のスタートラインに立たせた時代であると考えます。

仏教が国家宗教として、国家の基軸となる

「ヤマトの時代」は、多大なエネルギーを費やして海外の諸地域から文化を採り入れてきました。そのサマは、現代日本が「国際化(グローバル化)」を叫んで欧米諸国と抜き差しならない関係に置かれているサマに酷似していると思いますが。この時代の特筆すべき政治行動は、隋・唐・百済・新羅・高句麗・渤海などと積極的な外交関係を展開し、その中で国家を形成してきたことです。これは、内向的で国家意識が薄れつつあった、後の平安時代とは、一線を画す事実です。

「ヤマトの時代」、「天皇」という称号を創案したことも、周辺国家との関係において特筆すべき出来事でした。このことは、中国の存在を意識しながらも、中華帝国を標榜しようとした姿勢を感じます。そして、「天皇」を最高主権者として、律令による中央集権国家の構築に成功したのもこの時代です。

平城京で、「ヤマトの時代」が完成

政務の中心である長安から学んだ政治中枢の舞台である「宮都」という都市計画は、平城京で完成します。その後の長岡京・平安京は、この平城京のコピーでしかありません。その意味でも、平城京遷都

は、「ヤマトの時代」の到達点といえるでしょう。

女帝の誕生も「ヤマトの時代」の政治手法

江戸時代の2人を除いて、女帝は「ヤマトの時代」にしか即位していません。前半の推古・斉明(皇極)・持統天皇の3人と、後半の元明・元正・称徳(孝謙)の、計6名の女帝です。

前半の3女帝は、もともと皇后として天皇の側にあって政治の情勢を知る立場にありました。ですから、皇后の時期と天皇の時期を加えれば、かなり長期にわたって政治に直接関与していました。後半の3女帝のうち、元明・元正は、後の聖武天皇を実現するための奉仕者のような立場(つなぎ役)であり、称徳は、聖武天皇に嫡子がいなかったので即位したという事情がありました。しかし、女帝の誕生は、いずれも天皇制を守るための知恵でした。

政争の具としての仏教

この項の最初に仏教が「国家宗教」と記しましたが、仏教がすんなりと「国教」になったわけではありません。「ヤマトの時代」には、崇仏派とされる蘇我氏と、伝統的なカミ信仰を主張する物部氏・中臣氏の政治的対立がありました。この政争に勝利した蘇我氏の指導によって仏教の「国家宗教」が成立したのです。根本的な思想論争がないまま仏教が日本に伝わったことが、その後の日本の宗教事情にも及んでいるのかもしれませんが。

「仏教の是非」を全面に立てた政争に勝利した蘇我氏が、後に外戚関係による政権運営で「国家観なき国家」を築きました。

日本仏教の幕開けと尼僧

蘇我稲目の後を継いだ馬子も仏教を広めました。馬子は、高句麗からの渡来人恵便を仏教の師としました。その導きで司馬達等の娘・嶋しまで僧名・善信尼とその弟子・禅蔵尼、恵善尼の3人を仏教伝道師に採用しました。いずれも渡来人の娘です。馬子は、これらの尼たちのために自分の自宅に仏殿を作り住まわせました。渡来人の娘たちが日本仏教の先導者だったのです。善信尼らは、587年に百済に戒を学びに行くことを馬子に願い出、翌年に許され百済に行きました。3年後に帰国して桜井寺(今日の明日香村豊浦)に住まいました。その後10名余の女性が

出家したこともその後の仏教に影響しました。

法興寺(飛鳥寺)が蘇我氏の氏寺として起工されました。百濟から仏舎利がもたらされ、寺の造営に必要な工人、仏塔に取り付ける鑪盤(鑄物)や瓦の技師、絵師たちが次々と遣わされました。これら「近代技術」を持った工人たちの招聘に成功したことは、尼僧たちの努力の結果です。この法興寺は、平城京遷都後に元興寺としてよみがえります。

推古天皇と厩戸皇子(聖徳太子)

蘇我馬子は、一族の政治的権力の優勢と安泰を目標として「女帝」という手法を編みだしたことは先に書きました。そこで生み出された女帝第一号が推古天皇です。推古天皇は、18才で敏達天皇の皇后になりました。それ以降、用明・崇峻朝の約20年間、熾烈な政争を目のあたりにしてきました。大王位につくに際しては、大きな決意が必要だったでしょう。推古朝の政治体制は、推古天皇—厩戸皇子(聖徳太子)—蘇我馬子の協調体制でした。

ここで、邪推ですが・・・馬子は、卑弥呼の例を応用したのではないか、ということです。

「魏志倭人伝」の卑弥呼です。「倭国は男子の王で、7～80年平穏であったが、後に乱れ、何年にもわたり戦いが続いたので、一人の女性を王に立てた。卑弥呼は鬼道に仕え、衆人の心を奪った」とありま

す。卑弥呼の成否は別として、卑弥呼の祭祀者としての存在価値を応用したような気がします。

ともあれ、推古天皇と摂政の厩戸皇子(聖徳太子)のコンビについて述べてみます。なお、あらかじめお断りしておきますが、「厩戸皇子」については、あくまでも私見です。

「十七条の憲法」

「以和爲貴、無忤爲宗」(和を以て貴しと爲す、忤ふること無きを宗とせよ)は、十七条憲法的第一条です。聖徳太子が創成したと言われる有名な一文です。「論語」の第一巻 学而第十二「有子曰 禮之用和爲貴」(礼を之れ用ふるには、和を貴しと爲す)が典拠といわれています。

権力闘争によって複雑化する国内を融和して、隣国並みに国としての体裁を整えるために作り上げた成文です。参考までに、第一条全文を下記に記してみます。

「和であることをもって貴しとせよ。逆らうことのないよう旨とせよ。人はそれぞれ考え方の似た者が寄り集まるが、心から生き方を求めているものは少ない。だから君主や父に従わず、近しい人とも仲違いをする。しかし、上の者と下の者が、穏やかに接して論議すれば、自ずからわかり合えることになる。どんなことでも巧くいくものだ。

海外出張の思い出 (旧ソ連・ノボロシースク編 ⑧)

高島 敬明

ノボロシースク市の於ける「LX-プロジェクト機器据付」は、既述のとおり日本、フランス、ソ連の参加国の共同事業ですが、中心的な役割はもちろん日本です。フランスは、下部工事、橋脚工事を担当し、ソ連は主として機器の運搬と作業員の提供です。今回はまず、フランスの業者について書いていきたいと思います。

フランスの業者は、「UiE社」でした。同社とは、最初のうちは言葉が通じず会議の時はフランス語

⇔英語、英語⇔日本語、と通訳が2～3名必要な時がありなかなか意思疎通できませんでした。1～2か月経つうちに同社の監督や作業員ともお茶目にウインクする間柄となりました。彼らは住居兼作業員宿舎として台船を牽引してこの地まで来ているので、食料や物資は豊富のようでした。我々は水一つでも瓶に入れたり2km離れた現場事務所まで帰って飲んでいましたが、彼らを見ていると瓶に入ったビールを木製の箱に入れて現場に持

参して飲んでいました。大量にあるものですから瓶の王冠を取って二口三口飲んで海に投げ込むのです。日本人作業員には、「欲しい素振りは絶対に見せるな！ビールに限らず物をもらったら絶対だめだ！」と言ってありました。それでも私を含め、たぶん物欲しそうにしていたんだと思います。

作業員仲間でもソ連の食事はまずくて散々だとすこしオーバーに手振り身振りで話していました。

ある時、寺島さんから「フランスの監督官が高島さんをディナーに招待したいと申し込んできました」と言われるのです。寺島さんに「ありがたい話ですが、人選はどうしたらいいですか？服装は？フランス料理ですかね？」と矢継ぎ早にお聞きしますと、「普通にしていればいいのではないですか。女性通訳のBさん(24～5歳の東京外大を出たばかりの人)を連れて行ったら」と言われました。ともかく事務所中大騒ぎになりました。参加を承諾したBさんからは、「おそらくフランス料理のフルコースですよ。」と言うので、「私はフランス料理は食べたことはありませんし、作法も知りません」と言いますと、「私のする通りにして食べてください。どうせ話せないんだし」と素っ気ない返事。2人ではまずいだろうと他のマネージャーを考えましたが適当な人が見当たらないので、結局当社の班長を連れて行くことになりました。尻込みする班長には、「私のマネをして黙って食べていけばいいから」と通訳から言われた言葉をそのまま拝借。

当日は小奇麗な格好をして、工事岸壁から船を訪ねました。中は思ったより広くエアコンも効いていてすごく清潔な感じでした。料理は期待していたフルコースではなく、前菜からスープ、そしてステーキまででしたが、肉とワインは美味しく感激しました。先方の片言の英語と彼女の流暢な英語で意思は通じたようです。彼らは監督2名でしたが、常時人が付いて世話をさせていただきました。彼らも街に出ることがあるらしく日本人の評判を教えてくださいました。それによりますと、日本人は惜

しげもなく金を使う、体が清潔であると評判だそうです。為替の関係と一人20リッターのお湯のお陰かなと思いました。彼らは、フランス人の体臭がいやだと街のソ連人に言われている、と話していました。我々サイドでお礼をしなければ、との話もありましたが、どんどんフランス人も空路帰って行くものですからそのままになってしまいました。

話は、ある現場でフランス人の監督からの忠告の話に移ります。監督は、「Mr.高島、ソ連人と英国人は泥棒が多いから現場でも注意した方がいい」と何回も言われました。フランス人と英国人はあまり仲が良くないようです。そのころ現場で小さな工具が無くなって困っていました。あまりにも盗難が多いので我々の要望によって海運省から警備員が付くようになりました。寺島さんの話ではそれでも用心した方がいいとのことでした。警備員は決まって女性で、制服の上から腰にピストルを吊っていました。派遣された警備員はいつもニコニコ顔でビヤダル(失礼)のような体形をしていました。彼女の前で腰のベルトがよく落ちないものだ、と日本語で話したりしますが彼女はニコニコといつも機嫌よくしていました。小さな工具はそれでも無くなりました。

ある時、保温工事屋さんがゴムボートに空気を入れて現場に持ってきました。黒海に物を落としてそのまま放っておくわけにもいかないし、作業員が落ちた時の為にも用意されたものです。用意した最初の日のことです。寺島さんから、「高島さん、毎日ゴムボートはたたんで回収しておきなさい」と言われました。皆は、「10メートル下の海面のゴムボートをですか？」と言い、しばらく回収するしないでもめましたが、結局面倒くさいこともあり置いてきたのです。

翌朝行って皆びっくりです。ゴムボートが無いのです。あちこち探しましたが見つかりませんでした。警備員の女性に聞いても知らないとのことでした。寺島さんは、「だから言ったでしょう。警



フランス「UIE社」の作業員の宿舎兼機材運搬用台船



石灰岩採掘の山が背後に。〈白い山肌〉は硬水になる。

備員もグルなんですよ!」と言。女性を警備員にする理由は次のことがあるようです。暴言を吐けばセクハラで訴えられ、必ず負けるそうです。こんな話があります。モスクワで日本の商社の幹部の方が酔いつぶれ、閉店の注意に来た女性を手で払ったところ、激しく殴打されたと警察に通報され収監されたそうです。しばらくの間日本大使館でも行方が分からなかったそうです。怖い話です(ゴムボートの話は、寺島さんの著書にも出てきます)。

夏になって、現場も鉄板の上ですから照り返しも強く熱くなってきました。私は、たまらなく喉が渴いたので急いで現場事務所に帰り、アラブの水差し形のポットにお湯があったので早速紅茶を入れて一気に飲み干しました。

これが不注意でした。この辺りは前にも書きましたが、〈白い山肌が連なっている山々〉であり、当然水は硬水です。少々硬水ではないので、我々は一度完全に沸騰させて軟水にして飲んでいましたが、どうやら中途半端に温めた硬水で作ったお茶を飲んだらしいのです。夕方になってくるとお腹がぐるぐる差し込んで来ました。トイレも一人で占拠する始末。油汗が本当にタラタラと流れます。寺島さんがつきっきりで看病してくれましたが、皆さんは最初は伝染病的な病気ではと気をもんだようです。そのうち水だろうとなり、薬もなくなただただ5日間宿舎に寝ていました。6日目から少し水が飲めるようになり、魚国のコックさんも

心配しておかゆを持ってきてくれたり、励ましてくれました。海外勤務の経験のある方はお分かりと思いますが、とにかく病気が一番精神的にもダメージがあり、悪く悪く考え体力的にも参ってしまいます。飲まず食わずで薬もなく、7kgの体重減で何とか生還できました。腹の皮と背中がひつつくのではと思うほど下痢と嘔吐に心身共に疲れ果てました。

仕事が順調でもやはり日本の会社に状況報告をしなければなりません。手紙はいつも開封されたものが届いていたようです。電話ならいいだろうと電話にチャレンジしてみました。受話器を取れば女性の交換手が出るようになっています。片言の英語で日本の番号を言うのですが、要領を得ません。挙句の果てには「極東方面の電波状況が悪く今日は日本に繋がりません」とのこと。何回試してもこんな状況でした。寺島さんの助言があり、やっと日本の交換手が出てやれやれと思ったらザアザアと雑音が入って話が出来なくなってしまいました。

時差の関係で日本の就業時間内に電話できる時間はわずかしかなかった。困っているとサブマネからあの電話を使ったらいいよ、と離れたところの電話を示されました。掛けてみると交換手も自然でスムーズに掛けることが出来ました。家族にも掛けましたが案外元気な声が聞けたので安心し、病気のモヤモヤも吹き飛び、やる気が出てきました。

(続く)

裏山は高山植物園のよう(青海省玉樹、街歩き)

佐々木 健之

2018年7月、四川省に住む大川健三さんが企画した、黄河源流を目指す旅に参加した。黄河源流は、日本で見たTV番組だと「星宿海」という池塘が源流だと紹介していた。そこまで行くのはかなり大変そう。今回の旅で、どこまで行けるだろうか？

7月7日、成都から最初の目的地丹巴へは路線バスで行く。バスに乗るのも大変で、検問用の改札があり、パスポートの提示を求められた。荷物も安全確認があって、飛行場にあるようなベルトコンベヤーに荷物を入れて安全確認された。

成都のバスターミナルは各地への路線バスが櫛形に駐車して初めての人は迷子になりそう。我々は大川さんの先導があるので無事、丹巴行バスに乗った。大川さんの配慮で座席を人数分より多く予約してあった。そのため二人掛けを一人で使えた。長旅なので窮屈さがなくありがたい。私が丹巴へ行くのは2012年以来、6年ぶりだ。

丹巴からは現地で乗用車2台を雇って行く。運転手を入れて総勢9人。7月8日7時30分出発。車に揺られていくつかの山河を越え、7月9日夕方、青海省の「玉樹」という街に着いた。玉樹は四川省から入った場合、省境の高い峠(このあたりの高山植物の撮影も旅の目的の一つだった)を越えたところにある。私は青海省が初めだったが、「玉樹」という名前だけは知っていた。青海省という印象から、勝手な思い込みで玉樹は砂漠にある埃っぽい街と思っていた。着いてみると玉樹は、草原の緩やかな山に囲まれた谷間街だった。ここは交通の要衝地でウィキペディアト

によると、人口は8万(中国語版では12万)と大きな街だ。

標高が3700mくらいの高地なので、玉樹を囲む山は森林は育たない。帰国してから調べて分かったのだが、2010年に玉樹付近を震源とする「青海地震」があって死者2698人と、深刻な被害を受けたようだ。予備知識がなかったこともあるが、市街地では地震の痕跡は分からなかった。

玉樹市街中心まで入って、今晚泊まるホテルを決め、すぐにパスポートを集めて宿泊手続きを済ませる。すでに夕食時間なので、ホテルそばの食堂「四川川味砂鍋店」に入った。運転手が推挙して入るところは、たいがい「四川風味」食堂だ。四川人は食べ物に対して保守的なのかな？ この時は石鍋に入った石焼き麺を食べた。

作り方をしていると、厨房で九つの石鍋を一度にコンロにかけて盛大に加熱している。石鍋が炎上しているようだ。従ってできあがりも一度にできる。極太の麺は春雨らしい。スープは塩味、トッピングはヤクの肉。ヤクの肉は硬い。腹が空いているので結構うまい。

壁に市当局の掲示板があり、営業許可証などとともに「年度(去年のことか)食品安全等級」という決定済みのランク付けの記載があった。上から[A好]、[B良好]、[C一般]のうち、この店は最下位のCだそう。DやEは無いのでまあ良しと思った。

夕食を済ませると、食堂前で「今日はここで解散」となった。ほとんどの人はホテルに戻る。時刻は午後8時近いのにまだ明るい。



玉樹の四川風味の食堂は9人分の石鍋を一度に着火した。(中)はできあがり。(右)はランク付け掲示



黄河源流に近い扎陵湖。大川さんの予想では、将来は管理された公園になる可能性大。人物は若い運転手の楊さん

私は通りに出て、通りかかったタクシーを捕まえた。時間を少し遡ってこの日の18時ごろ、玉樹のホテル駐車場で車を降りたときに近くの小山が見えた。それは市街のすぐ後ろから立ち上がり、頂上には柵をめぐらせた展望台付らしいものがある。尾根は遊歩道になってるのか人が歩いているのが見えた。高さはおよそ200mちょっとかな(その時は)と踏んだ。

夕食後、その展望台行ってみたかった。だが歩いて行くと日没になってしまうだろう、しかしタクシーなら5～10分くらいだ。きっと山を登る車道があると思った。そんなわけでタクシーを捕まえたのだ。

タクシーに乗り込むと、窓越しに「あの山へ行って」と指さした。30歳台くらいの運転手は最初は怪訝顔だったがすぐに理解して走り出す。街はずれになると民家が続く狭い谷に入った。次に枝道に入るとすぐに蛇行する山道になり、あっという間に目的の山上駐車場に到着した。

運転手に待つようにいい(通じたかどうか分からない)、帰らないよう料金を払わないで車を降りる。そして「見晴し台」へ続く遊歩道の階段を登った。

遊歩道は木道で、円形の展望台に続いていた。もう夕暮れで玉樹の街が夕闇に沈むところだ。乾いた感触のコンクリートの建物が立ち並び、それが夕日に沈むありさまは、まさに異国の街だった。

展望台の先端まで急ぎ足で行き、街並みの写真を撮る。山腹をのぞき込むと、下の道路から一直線に登ってくる踏み跡があった。これなら使えそうだ。

駐車場へと戻り始めると、タクシーの運転手が登ってきて、彼もしきりとスマホで景色を撮っている。ここに来たことが無いのか？

おおむね小山の様子が分かったので、ホテルへ帰ることに。車に乗り込み、運転手にホテルのカードを見せて(住所と電話番号が記載してあるドアキー兼用のカード)、「ここ」と示したが困惑の表情を見せた。え！もしかして字が読めないの？…どうも読めないらしい。しかし運転免許試験とか、スマホのメールなどはどうするの？しかし現実はそのような人がいるのだから仕方ない。

街まで下ったところで、角ごとに「右」とか「左」とか声を出して誘導し、適当なところで降ろしてもらった。料金を訊くと20元だという。350円くらいか。これで待ち時間込みでは気の毒なので30元払って、ホテルまで歩いて帰った。

明けて7月10日は黄河源流へ行った。早朝の暗い玉樹の街を出発、最初は高速道路を使って快適に飛ばした。山あいをトンネルと橋梁で抜けると、起伏のない高原となり、平行して一般道も通っている。隣の一般道にはトラックが疾走している。こちらの高速道とほとんど同じ速さだ。何のための高速道路か？

おまけに、この高速道路は、とんでもない作り方で、明らかにところどころ波打っている。波打ち部分に入ると、後部座席は、激しく上下に叩きつけられて痛い。運転手はそれなりに注意し、問題箇所を徐行するのだが、はっと気がつく前に突っ込んでしまうこともある。車の構造も関係するのだろうが、特に後部座席はクッションが悪く、臀部に直に響いた。高速道路は3年前に作ったばかりだそう。基礎工事が駄目なのか、標高3000mを越えた高地なので、凍結、融解を繰り返して地盤沈下となったか。

高速道路ではないが、道路に敷いて車両を徐行させるギザギザの板がある。道路工事現場や、政府建



残照の玉樹の市街。当代山見晴台から



山道の途中から俯瞰した市街。手前に高山植物がある。



高山植物の一部。裏山の花とは思えないほど見事だ。

物の前後に敷設してある、強制徐行装置と呼びたい。ここを通過するときもかなり激しく振動する。ゆっくりでもだ。救急車で病人を搬送したら振動で悪化するだろう。中国的な仕掛けだと思った。

黄河源流へのドライブは、予想より遠かったの、ほぼ源流のちょっと手前の「^{チャーリン}扎陵湖」という美しい湖で引き返した。

帰り道は、眠気と戦う運転手を鼓舞して、夜の12時近くに再び玉樹に帰り着いた。残業8時間分くらい運転した勘定だ。連泊で同じホテル「喜馬拉雅大酒店」に泊まった。この時は運転手も大変だったが、乗っている我々も疲れた。

明けて7月11日、明るくなるのを待って6時過ぎホテルを出た。主要街道を横切って再び展望台のある小山に向かった。タクシーで行ったときには気づかなかったが入り口に「当代山現景平台」という看板があった。この山の案内板である。今度は歩いて登るつもりで、当たりを付けた民家の脇から踏み跡をたどる。人糞らしきものも地面にあるので油断

ならない。犬、吠えかかって牙をむく犬が現れないように願う。人家のあるところを過ぎ、土手を越え、草むらから斜面に取り付いた。少し登るとはっきりした山道になってひと安心。枝道があるものの山頂へ続いている。

足下を見れば開花した高山植物の盛りだった。カメラをとりだし、ここそこと現れる花々を撮影しながら、尾根を登っていった。玉樹は3700mの高地なので空気が薄く、ちょっとの坂道で息切れがする。休み休み撮影して登るのがちょうどよい。

標高差200m位の小山と思ったが、帰国してからグーグルアースで確かめると、なんだ標高差100mしかなかった。しかし、ゆっくり登ったせいで上まで50分ほどかかった。ようやく展望台の柵まで登り着いた。この山道は、公認された登山道ではなく、勝手に人が入り込んでできた道のような。柵と遊歩道とは遮断されている。山の上は駐車場側から延びる遊歩道の終点で、円形の広場となっていた。

ここまで来たことに満足して、帰ることにした。登りより下りの方が滑るので危ない。

植物の写真は下りだと角度が変わってそれなりに撮影意欲が湧く。景色を楽しみながら、ゆっくり下る。一部岩場のような所があったが問題なく降りた。登った道と少し違うが、直接道路に降りる道をとった。斜面最後の所は土手の上に金網があって、向こう側の道路に降りられない。幸い人が通った破れた箇所がありそこまで迂回する。そして散歩の途中ですよといった素知らぬ顔を作り、道路に降り立った。

ホテル前での集合時刻にはまだすこし間があるので、玉樹の街を散歩することにした。歩道を歩いていると、向こうから歩いてくる運転手の鄧さんに出会った。彼も散歩中らしい。やあやあと大げさに挨拶をしてから、私は左側にある登ったばかりの山を指さし、「あすこへ行ったよ」と身振りで伝えた。

鄧さんと別れると、ホテル前を通り過ぎて、回教的な臭いのする一角に入った。絨毯屋さんとか、遊牧民用らしきテント屋さんがあった。テント屋さんの壁にはテント見本の写真がありいろいろな種類があるものだと感心した。

以上、早起き散歩散文でした。

「台湾少年工」を語り継ぐ ～日台の絆～

1943年、太平洋戦争末期の神奈川県旧高座郡に台湾から8400人の少年工がやって来ました。厚木基地に隣接する高座海軍工廠で働くために台湾全土から12～19歳の優秀な少年たちが選抜されました。高座海軍工廠の関連施設は現在の相模原、大和、座間、綾瀬の各市にまたがっています。

戦時下の日本では労働力が不足し、当時日本統治下の台湾の少年たちが動員されました。学校の先生から「日本へ行けば中等教育を受けつつ工場実習で給料をもらえ、5年後には技師になれる」という好条件に成績優秀な少年たちが志願しました。

希望を抱いて日本の工廠に着いた少年工は、すぐに「だまされた」と気が付きました。教育どころか働きづめの毎日だったのです。旧高座郡の農家の人たちは芋やおにぎりを差し入れたり、少年工の繕い物をしたりして家族のようにかわいがりました。

少年工は基礎技術をみっちり鍛えられ、懸命に働いて、厚木基地配備の局地戦闘機「雷電」を製造しました。少年工は日本各地の工廠にも派遣され、ひもじさ、寒さ、望郷の念や銃爆撃の恐怖に耐えて過ごしていましたが、45年8月の終戦を迎えて突然海軍省が解散になり、少年工は工廠内に取り残されました。備蓄米が底をつき、少年工は自治会を組織、神奈川県に直訴して配給を受け帰国の日を待ちました。

46年1月から少年工は順次台湾に送り返されましたが、帰国した台湾は蒋介石政権で、良い仕事はほとんど大陸から来た外省人に占められ、なかなか仕事に就けませんでした。せっかく身につけた日本語は使用禁止になり、代わりに中国語(普通話)を学ばなければなりません。戒厳令下では白色テロが吹き荒れ、少年工が集まることにも危険が伴い、政治犯として銃殺された少年もいるなど大変な苦勞をしました。

87年に戒厳令が解かれて、やっと「台湾高座会」



台湾高座会の方々は、50周年を契機として、1997年、大和市の引地川公園に「台湾亭」を建立、大和市に贈呈した。

という少年工の同窓会ができました。以後、節目節目に日本の関係者と温かい日台の往来が続いています。93年に50周年の同窓会が日本で開かれた時には、1400人の元少年工が来日しました。元少年工の大半が90代になり、今年の75周年式典に来日できる人は40人前後です。

今秋、座間市の芹沢公園に「少年工顕彰碑」が建立されます。日本での同窓会は今年が最後になるかもしれません。旧高座郡での生活は少年たちが思い描いたものとは違いましたが、「日本は青春時代を過ごした特別な場所」と、今も日本を懐かしんでいます。元少年工は苦しみを乗り越え、ずっと日本を大切に思っています。

私は以前から高座海軍工廠の場所を知りたいと思っていたところ、今夏、新聞に相模原市相武台公民館で台湾少年工の展示があるとの記事が掲載されていました。内容の濃い展示を拝見し、当時工廠で少年工と一緒に事務をとられた方の貴重なお話が聞けました。少年工が毎日歌っていたという「少年工の歌」を朗々と皆に聞かせてくれたときには、当時の少年工の気持ちを思い胸がいっぱいになりました。75年続く「日台の温かい交流」と「台湾少年工の存在」を語り継いでいきたいと思います。

(塚田民枝)

粉にまみれて暮らしたい!

～ 'わんりい' 10月・11月予定の麵料理講座に寄せて～

岩田温子

今年(2018年)の3月初旬に一週間ほど陝西省延安から黄河近くの延川を旅しました。その帰り、黄河を挟んだ隣の山西省太原に住む友人に、近くまで来たのだからちょっと挨拶をと思い立ち寄りしました。たった一晩の再会でしたが、友人は雑穀や豆などの粉5キロをお土産に用意して待っていてくれました。どうして粉5キロもなのかという、一年前に山西省を訪ねた折、山西省の色々な穀類や豆類を粉にした麵食(粉食)が大好きな私は何とかして自分でも麵づくりを覚えたいと思い、友人のお母さんに教えていただいたことがありました。

お母さんは小麦よりは雑穀を主に食する山西省西北部の農村出身で、家族のために色々な料理や麵を手早く作ることが上手な方と聞いていました。その時は燕麦の一種のヨウミエン(莜麵)、高粱、蕎麦の粉

を使って何種類かの麵を、そしてモチキビを使って油糕という油で揚げた餅などを教えていただきました。そんなことがあり、友人はまた私が帰国してからも麵を作って楽しめるようにと5種類の粉5キロを用意してくれていたのです。

私は山西省や隣の陝西省の黄土高原と言われる地域の民間芸術が好きで、度々足を運びました。黄土高原は海拔が高く、気候は冷涼で、乾燥しています。食事は小麦や雑穀、豆などを粉にして作る麵が主です。麵といっても実にバリエーションが豊かで驚くばかりです。長いひも状の麵ばかりではなく、餃子や饅頭、春巻きなども麵食ですし、緑豆やジャガイモ澱粉から作る春雨なども麵食です。また、細切りにしたジャガイモやインゲン豆を小麦粉でまぶし、蒸して、油でさっと炒めるのもやはり麵食です。つまり粉を少しで

も使えば麵食になるのかもしれませんが。

そういう訳で、いつかは中国のあちこちに足を運び、もっともっと麵食の奥深い世界を知りたいという夢に取り憑かれています。(単にただ食べ歩くだけの話ですが)。

聞くとところによると石臼は数千年前に山西省で発明されたそうです。なるほど硬質の穀物は石臼で挽いて粉にして初めて消化がよく、栄養がある口当たりの良い食べ物へとなくなっていったのでしょうか。長い間の人間の食べることへの熱意と工夫の積み重ねが、その結果なの

だかと改めて感じ入りました。

翻って日本ではと見ると、大昔には粉にして使うというようなことがあったのかもしれませんが。しかし、今はそういった使われ方を見ることはとても難しいと感じます。



友人のお母さんが手作りのさまざまな麵料理がテーブルに並んだ

私は現在、長野県に住んでいますが、蕎麦粉を除いて農産物直売所で粒状の粟、黍、高黍(高粱)が売られているのは見たことがありますが粉末になったものは見たことがありません。お米に少量を混ぜて炊くということが一般的なようですが、他の食べ方は店の人に聞いてもわかりませんでした。土地のお年寄りに尋ねても答えは同じでした。

これらの雑穀はアレルギー物質が無く、ミネラルや蛋白質などの栄養が豊富なので、粒状で使っても美味しいとは思いますが、粉にすればもっと利用の範囲が広がり、食生活が数倍楽しめるのにと惜しい感じがします。きっと日本では縄文時代の終わりの頃から稲作が入ってきたそうですから、栄養があり、美味しい米の味に満足して、他の穀類などを手間暇かけて食べることは考えもしなかったのかも

しれませんね。

せっかく友人が用意してくれた粉を自分だけで楽しむのはもったいなく、できるだけ多くの方にも雑穀の麺食を味わい、楽しんでいただきたいと思います。幸いにも‘わんりい’仲間のイエリンさんのお母様で、中国東北部の遼寧省出身の吳躍鳳さんが講師を務めてくださり、東北地方の麺食の作り方を10月23日と11月15日の2回に分けて教えてくださいます。

以前、小麦粉を使った麺づくりの講習会で一緒にした時に、余った小麦粉でチョイ、チョイと手早く、可愛らしい点心を作られたのを覚えています。お土産に頂いた山西省の粉がどんな料理になるのでしょうか。きっと今度も素晴らしい東北風味の麺づくりを教えてくださいませんか、とても楽しみにしています。どうぞ皆さまと一緒に中国風麺づくりと料理を楽しみましょう！

※中国西北部は寒冷地でお米の栽培に向いていません。その為昔からいろいろな雑穀を美味しく食べる工夫をしてきました。昨年、‘わんりい’料理講座で取り上げた莜麵(燕麥の一種)もそうですが、雑穀類はそのままでは硬く消化が悪いので粉に挽いて消化しやすくして頂くことが多く、各種各様の麺料理が生み出されました。雑穀は、最近、米にない優れた栄養価があることが見直されており、今回の料理講座で使用の高粱は、姿がトウモロコシに似ているので「モロコシ」「タカキビ」とも呼ばれ、その栄養分はカリウム、マグネシウム、カルシウム、鉄などのミネラルの他、食物繊維、たんぱく質が豊富とのこと。吳さんも高血圧や糖尿病に良いと言っています。日本でも健康志向のため雑穀をお米に混ぜて炊いて頂く方が増えているようですが、雑穀の粉もネット販売などで購入できるようです。時にはお米に代えて、雑穀の粉料理を楽しんでみるのもよいかもです。

【わんりい料理講座】

食の知恵と工夫がいっぱい！中国西北地方の粉食文化(麺料理)其のI

※中国では粉食料理は全て麺料理と呼ばれています

高粱の粉の蒸餃子と蕎麦粉の葱餅

● 2018年10月23日(火) 10:30 ~ 14:00

● 参加費 1500円 ● 定員: 15名

■ まちだ中央公民館・調理室 (小田急線南口徒歩5分 / 横浜線町田駅ルミネ口徒歩3分)

■ 講師: 吳躍鳳(ウー ヤオフォン・中国遼寧省出身)

♪メニュー♪

- 1) 高粱面蒸餃(高粱の粉の蒸餃子)
- 2) 蕎麦面雑糧葱油餅(蕎麦粉の葱餅)
- 3) 吳躍鳳家の麻婆豆腐
- 4) 白きくらげの中華サラダ
- 5) 中華のデザート

※四川省在住の大川健三氏より四川省特産の新鮮な花椒を頂きましたので、メニューに麻婆豆腐を入れて頂きました。参加の皆様が自宅でもすぐ作れるように少しずつ差し上げます。

※参加される方は、エプロン、筆記用具、布巾をお持ちください

◆申込みと問合せ ☎042-734-5100 ‘わんりい’

E-Mail wanli@jcom.home.ne.jp

次回「山西省の粉料理」其の2は、下記の日時で予定しています。

● 11月15日(木) 10:30 ~ 14:00

● 場所: 麻生市民館・料理室(小田急線新百合ヶ丘駅北口3分 麻生区総合庁舎裏手)

● 講師: 吳躍鳳(遼寧省出身) ● 参加費: 1,500円 ● 定員: 15名 ◆ 問合せは上記へ



吳躍鳳さん



高粱の粉の蒸餃子



蕎麦粉の葱餅



■ 来年から、誰でも会報が作成できるよう Word で編集する予定です。今月は予備段階として「掲示板」を簡素化しました。

●【わんりいの催し】中国語で読む・漢詩の会

漢詩で磨く中国語の発音！中国語のリズムで読んで漢詩の素晴らしさを味わおう!! **録音機をお持ちの方はご持参ください。**

- 会場 : まちだ中央公民館
- 日時 : 10 : 00 ~ 11 : 30、
10月7日(日)第1学習室
11月25日(日)視聴覚室
- 講師 : 植田渥雄先生 桜美林大学
名誉教授、現桜美林大学孔子学院講師
- 会費 : 1500円(会場使用料・講師謝礼など)
- 定員 : 20名(原則として)
- 申込み : ☎090-1425-0472(寺西)



E-mail: ukiuki65jpp@yahoo.co.jp (有為楠)

●平成30年度(第73回)文化庁芸術祭参加公演
第一回 小濱明人 尺八 リサイタル

<https://iflyer.tv/ja/event/306007>

※特別出演=石川利光(尺八)

小濱明人さんは'わんりい' ボイス・トレ講師Emmeさんのご夫君。古典や自作曲を中心としたソロ活動の他、民謡の伊藤多喜雄率いる『TAKiO BAND』等数々のグループに参加している。海外公演も多く、欧米・アジア・オセアニア・アフリカなど計35カ国で演奏の国際派尺八奏者です。今回のリサイタルでは、古典本曲の世界をじっくりとお楽しみ頂けます。



- 2018年10月16日(火) 開場 18:30 開演 19:00
- MUSICASA (ムジカーザ) 渋谷区 代々木上原
- 前売 3,500円(当日 4,000円)
- ◆ オバマ : ☎/FAX : 03-3867-8303

●日中平和友好条約締結40周年記念

女子十二楽坊 日本公演 2018 <http://kusi.co.jp/lp/>

※詳細は、[女子十二楽坊.jp](http://kusi.co.jp/lp/) で検索できます。

ゲスト : 川井郁子(ヴァイオリニスト/作曲家)
司会 : 朝岡聡(フリーアナウンサー)

- 新宿文化センター 大ホール
〒160-0022 新宿区新宿 6-14-1
☎03-3350-1141
- 11月27日(火)/ 11月30日(金) 18 : 30 開演
- チケット : SS 9500円 S 8500円 A 7500円
チケット購入 : イープラス <http://eplusu.jp> 他



●【わんりいの催し】

ボイス・トレをして日本の歌を美しく!

漢あなたも私も笑顔が美しくなる!身体力を抜いて、気持ちよく発声しよう!! 声は健康のバロメーター! 気持ち良く歌って毎日元気!!

*動きやすい服装でご参加ください

- 会場 : まちだ中央公民館
- 日時 : 10 : 00 ~ 11 : 30、
10月30日(火)視聴覚室
11月27日(火)視聴覚室
- 講師 : Emme(歌手)
- 会費 : 1500円(会場使用料・講師謝礼など)
- 定員 : 15名(原則として)
- 申込み : ☎042-735-7187(鈴木)



E-mail : wanli@jcom.home.ne.jp(わんりい)

●初心者体験のお誘い【鶴川水墨画教室】

季節の花など水墨画で描いて楽しんでみましょう。

体験参加1000円です。手ぶらで参加OK! 見学は無料です。気軽に教室を覗いて見よう!!

- 会場 : 鶴川市民センター
町田市大蔵町1981-4

※駐車場あります

- 日時 : 第2又は第4月曜日、14 : 00 ~ 16 : 00
- 講師 : 満柏
- 体験参加費 : 1000円(見学無料/手ぶら参加可)
- 問合せ : ☎042-735-6135(野島)



●山形国際ドキュメンタリー映画祭(アジア千波万波部門)奨励賞・日本映画監督協会賞・受賞

映画「あまねき旋律(しらべ)」(2017年インド83分)

<http://amaneki-shirabe.com/>

インド山間部の村々で古くから伝承されてきた「歌」をめぐる音楽ドキュメンタリー。ミャンマーとインドの国境近いインド東北部を舞台に、棚田の雄大な風景、移り変わっていく季節、歌と共にある人びとの生活や農作業の一部始終をカメラに捉えた。

- 上映 : ポレポレ東中野 10月6日(土) ~ ほか

【'わんりい'の原稿を募集しています】

'わんりい'は、2月と8月を除く毎月発行の当会の会報です。主として、会員と会の関係者の皆さんの原稿でまとめられています。海外旅行で体験された楽しい話、アジア各地の情報やアジア各地で見聞いた面白い話、これらと思うイベント情報などを気軽にお寄せ下さい。

日中文化交流市民サークル 'わんりい'

入場無料

- ‘わんりい’参加 全員集合!!
第20回 町田発国際ボランティア祭
2018 夢広場
～この星に平和と希望を～



国際支援と友好活動をしている団体が集結の、エスニック気分溢れるお縁日です。

- 会場：まちの駅「ぽっぽ町田」イベント広場
- 日時：11月3日(祝) 10:00～16:00
わんりい’の会は、ボイス・トレ講師Emme(エメ/歌手)さん指導によるボイス・トレ体験、ラオス山の民・モン族による美しい刺繍小物の販売や‘わんりい’関係者出版の書籍の販売を予定しています。お誘いあわせくださって是非、おでかけを!
- 主催：2018 夢広場実行委員会
- 共催：(社福)町田市社会福祉協議会
(一社)町田青年会議所
- 問合せ：☎042-722-4260 町田国際交流センター
E-mail：wanli@jcom.home.ne.jp(わんりい)



皆で大きな声を張り上げてボイス・トレ体験

入場無料

- 神奈川県立地球市民かながわプラザ (あーすぷらざ)の展示から

▲そのI

田中克佳 写真展「パタゴニア—最果ての大地に広がる驚愕の世界」

<http://www.earthplaza.jp/>

日本の国土の二倍を有するその大地は、まるで原始の地球を彷彿するかのよう—その最深部に広がるパイン国立公園には、我々を凌駕する圧巻の光景が広がっている。地球上に残された数少ない極限の大地を、田中克佳氏による40点の作品で紹介する。

- 会場：神奈川県立地球市民かながわプラザ(あーすぷらざ)3F 企画展示室☎03-3350-1141
- 会期：10月13日(土)～12月24日(月祝)
10:00～17:00 ※祝日除く月曜休館
- 田中克佳プロフィール
1965年横浜生まれ。米国『ナショナル・ジオグラフィック誌』フォトグラファーズのアシスタントを経て独立し、世界各国のメディアに発表を続けている。➡

➡ 2005年よりパタゴニアの撮影を開始。毎年、現地を訪れ魅惑の大地を写真に収めてきた。著書『踊るブラジル—私たちの知らなかった本当の姿—』(小学館)等。ニューヨーク在住。

■関連イベント

写真家 田中克佳 トークイベント「日常から遠く離れて—パタゴニアで撮ること—」

ニューヨーク在住の写真家・田中克佳氏が来日し、トークイベントを実施。世界各地で取材を続けている氏が、南米最南端パタゴニアの大自然を撮影する醍醐味や魅力について、写真を交えて語る。

- 会場：あーすぷらざ2F プラザホール 定員200人
※申込不要
- 日時：10月13日(土)～12月24日(月祝)
11月23日(金/祝)14:00～15:30(開場30分前)



(© Katsuyoshi Tanaka)

▲そのII

県民が見た「世界遺産 絶景 暮らし 写真展」未来に残す地球の宝、この感動を伝えたい

「世界遺産」「地球の絶景」「世界の暮らし」のテーマのもと、神奈川県民が国内外で撮影した応募作品の写真展。

※会期、会場他、上記、田中克佳写真展と同じです。

使用済み古切手と書き損じの葉書でご支援を!

日本スリランカ文化交流協会では、スリランカへの教育支援の為、古切手と書き損じ葉書を集めています。皆様からたくさんの切手をお届け頂き感謝しております。古切手は周囲を1cmほどを残して切り取り、ついで折に田井にお渡し下さい。

*

いつも‘わんりい’会員の皆さん及び‘わんりい’関係者の方々に古切手や古はがきの回収にご協力頂き有難うございます。お寄せいただいた古切手などはその都度整理し、ある程度まとまった時点で換金し、スリランカの貧しい家庭の子供たちの教育支援としております。今後ともご協力をよろしく願いいたします。

日本スリランカ文化交流協会代表 為我井輝忠

**‘わりい’は、いつでも新入会を歓迎しています。
年度途中からの入会は会費の割引があります。
気楽にお問合せください。**

年会費：1500円 入会金なし

‘わりい’振替口座（郵便局）00180-5-134011

‘わりい’の名は、‘万里’の中国読みから付けられました。文化は万里につながるの想いからです。

主としてアジア各国から来日の方々と協力し、講座、研究会、鑑賞会、展覧会等を開催し、文化的交流によって国や民族を超えた友好を深めたいと願っています。

会員になりますと

①年10回(2月・8月を除く)おたよりをお送りします。

②‘わりい’の活動の全てに参加できます。

問合せ：044-986-4195（寺西）

◆インターネット会員の制度もあります。メールアドレスを頂いた方に、毎月、美しい‘わりい’をPDFカラー版でお送りします。こちらは無料で購読できます。

◆町田市民フォーラム4F・町田国際交流センター、町田生涯学習センター6F、中国文化センター、川崎市国際交流センター、神奈川県立地球市民かながわプラザ・他でご自由に取って頂けます。上記へお問い合わせください。

10月定例会開催日及び 11月号‘わりい’発送予定

- ◆ 問合せ：☎044-986-4195(わりい)
- 定例会：10月12日(金)
13:30～ 三輪センター・第三会議室
※定例会は‘わりい’会員の皆さんはどなたでも参加できます。
- 11月号‘わりい’発送日：10月31日(水)
10:30～
- 場所：三輪センター 町田市三輪緑山4丁目14-1
<https://www.city.machida.tokyo.jp/community/shimin/com/com13.html>
第二・第三会議室
※おたより発送日は弁当持参です。

【サミラ シェバさんの不思議なイラスト】

‘わりい’の皆さん、昨年‘わりい’と一緒に送りましたサミラシェバさんのマンガ「カラズン」を覚えていらっしゃいますか。サミラさんは、昨年10月にフランスに帰国されて漫画は完結しないままでしたが、この度、‘わりい’の皆さんにご自分のイラストを紹介したいとこのことで作品をお送り下さいました。‘わりい’印刷版はカラーでないのが残念ですが、PDF版や‘わりい’HPで色付きのサミラさん独特のイラストをご覧ください。迷路の中で遊ぶような楽しさがありますよ。これからも、本国フランスから毎号イラストを送ってくださるとのことです。どのようなイラストが届くでしょうか。ご期待下さい。

(田井)



カット
サミラ シェバ



▶‘わりい’ 237号の主な目次◀

- 「寺子屋・四字成語」(16)病入膏肓(病膏肓に入る)…2
- 論語断片(40)「无宁死于二三子之手」
(無寧ろ二三子の手になん) ……3
- 五都市(上海・南通・揚州・鎮江・無錫)周遊(2)…4
- 混迷の時代を拓くザメンホフの人類人主義(28)…6
- 東西文明の比較(28)「大和(やまと)の時代」…8
- 海外出張の思い出・旧ソ連⑧ ……9
- 裏山は高山植物園のよう(青海省玉樹街歩き) …12
- 「台湾少年工」を語り継ぐ ～日台の絆～ ……15
- 粉にまみれて暮らしたい ……16
- 11月の料理講座・案内 ……17
- ‘わりい’掲示板 ……18・19・20